高して賞音稀なり)蓋し當時は只た論律を學ひ梵音を譯し徒らに教學を講説するのみ(一字不説の深意を會せず徒らに黒を數ふ)故に忽ち達磨を以て異端邪説を唱ふる者として誹謗四方に起る光統律師流支三藏特に來りて論議を試む達磨相を斥けて體を示す(詩人に非すんば詩を献する勿れ又是れ老婆心切)然れども達磨の機鋒電飛ひ雷走る茲に於て諸論者大に怒り終に達磨を撲ち其前齒を折る然れとも達磨寂然不動たり(苦瓠は根に連て苦し)彼等益々猜氣の念嫉妬の性自ら堪へす遂に毒殺せんと欲して

毒汁を濺くこと數度なりしも其の効なし(仰天の唾逆風の塵還て自己を汚す)其後毆打兇暴危害交々至ると雖も達磨坦然として更に動着せす(甜瓜は蔕に徹して甘し)少林九年の曉二祖慧可を得て心印を授く(可憐生瞎衲を接得す)是れ達磨を缺齒胡と稱するは之より始まる是れ達磨の苦節を以て自己に應用せよ豈に對岸の火災視して可ならんや諸仁者此事の爲めに奮勵一番第二の達磨たれ

鐵石心腸

雲居國師は松島瑞岩寺中興祖なり仙臺公伊達忠宗

の懇請に應して松島に赴く(事生ぜり好事もなきには如かず)途次偶ま那須の原を過く時に盜賊數輩路を要し白刃を閃かして頻りに脅迫す(危きに臨みて智勇顯はる)茲に於て師囊を傾けて金を與ふ然れども賊尚ほ飽かす其衣帶を奪はんとす(何ぞ與へさる衣帶は是れ外來底)師乃ち地上に端坐して曰く此嚴冬に際し裸體にして行くこと能はす(仁義道中)汝等强て衣帶を奪はんと欲せば請ふ我を殺せと(辭あれば自然に香し)瞑目拱手寂然として動かす茲に於て賊等其言に感し乃ち金を返し羅拜して曰く我等多

年賊を業として人を刼掠すること多しと雖も曾て師の如き威德高大なる人を見す(君看よ陌上の二三月那樹の枝頭にか春を帶ひさる)願くは罪を宥して弟子と爲せよと師遂に其請を容れ率ひて松島に到る(他の眼睛を換却する力天を驚し地を動す然りと雖も癩兒件を率く傍人の笑ひを如何せん)嗚呼此人にして此行あり窮鳥懷に入れば漁者も之を殺さずと況んや大慈大悲を誓願とし下化衆生を以て任とせる國師に於てをや

玄虎の眉尖刀

勢州朝香の玄虎藏主は曹洞の角立なるものにして鐵面嚴冷なるを以て江湖の雲衲を慴服せしめき(宗旨の本分必すしも然らす)尋常其徒に示して曰く凡そ參禪は猫の鼠を捉ふるか如く淮陰か水を背にして陣するか如くせよと(人を欺かず)眉尖刀を執つて衆に接し些も擬議せば驀直に之を揮ふて門外に逐ふ(好手段)其惡辣なるや知るへきなり故を以て一時弟子大に振ふ(謂つべし强將下に弱兵なしと)

庭前の牡丹花

武田信玄一日庭上の牡丹花を指し諸禪者をして下

語せしむ(無事に事を生ず是れ何の心行ぞ)洞上の長老曰く世尊拈花迦葉微笑(相隨來也)關山派の即傳和尚曰く獅子奮迅象王回顧(是又合頭の語)

病中の禪力

異禪師或時痢を病む晝夜百回(時節因緣好機得難く失ひ易し)既に死に近く口言ふこと能はず身動くこと能はず海印三昧も亦用ゆるを得す從前の所得總て寸毫の効なし畏怖交々迫り衆苦止む時なし(何そ閻梨を苦殺せさる)乃ち强て氣を勵まし高く蒲團に坐し一爐の香を燒て三寶龍天に祈り(祈を天に求む

漏逼少からず)從前の諸惡業を懺悔して曰く若し命終らば願くは般若の力を以て因緣ある處に生れ早く出家せん(既に是れ生なし死何の處に在る是れ一塲懺囉)若し病癒るを得ば直に俗を棄て僧となり早く悟明を得て後人を濟度せんと(此不唧嚕の漢寐語する勿れ)願ひ終て無字を提起し正念工夫生死を顧みず(唧何の閑工夫ぞ如かず枕を高ふして眠らんには)之を久して臟腑鳴動すること三四回然れとも敢て其苦を顧みず既にして眼皮動かす又竟に身あるを知らす(鬼窟裡に墮在す)只た無字綿々として絶へ

ず(去死十分ならず)晩に至りて漸く坐より起てば病退くこと一半なり復た三更に至るまで坐すれば病苦全く退き心身輕安を覺ふ(醉後郎當人を愁殺す)是れ門外漢は或ひは信せさるべし

怒濤中の安眠

白隱禪師遊方し曾て東に帆らんとし兵庫より船に乘る時月明に際し船中皆清光を賞して談笑す(天上の月を貪り見て掌中の珠を失却する勿れ)師獨り行李の傍に横臥す(牡丹花下の睡猫兒)既にして一睡目を醒せば船は錨を下して港頭に在り(夢中の祖師西

來意)師問ふて曰く何ぞ船を發せざると(毒氣人に迫る)舟夫叱して曰く此の痴ぼけ坊主夜來暴風雨あり前後出帆せし十數艘の船は皆沈沒し此船も亦怒濤激浪に苦み已に顚覆せんとせしこと幾回なるを知らず(痴人面前に夢を說くこと勿れ)船中皆神佛に祈り吾等も亦髮を斷て之を祈り漸く万死に一生を得たり(何ぞ死せざる一死すれば再死なし)然るに只た獨り安然として鼾聲鼕々たり(此漢獨り鼾聲鼕々たるのみならず天下の人皆然り)我多年海上に從事すと雖も未た汝の如き大膽なる者あるを見ずと(千箇

万箇千万箇あり只た是れ見不見然りと雖も恁麼の大膽何の處より得來る妨けす人をして疑着せしむ)舟中皆呆然たり。

君子愛財

佛源禪師法を石溪に嗣き鎌倉副師の請に應して來朝す實に我建長の第三世なり師平生覩金を得れば悉く之を壺中に貯へ太た之を惜みて未た曾て浪に一錢を費さず(眼東南を視て意西北に在り)衆便ち嘲笑して曰く唐人鄙吝則ち然りと(燕雀元より鴻鵠の志を知らず)佛源禪師褒として充耳の如し或時福山

祝融の災あり山衆頭を鳩めて相議しその再建の費なきを病む此において佛源禪師多年貯ふる所の黄金を以て衆に付與し且つ曰く君子財を愛す之を用ふるに道ありと(果然)一衆大に服す

釋迦の遠孫

日峰の神足桃隱和尚は元と匠者の子なり(火裏の蓮花)東福に入て薙染し才識絶倫なるを以て同學の僧之を嫉む、當時東福に掛錫する者多く名門豪族の子にして桃隱か匠者の家より出てたるを賤み一日桃隱を挑みて遊戯し身を躍らして塹を越ゆ相約して

曰く塹を越へんとするものは先づ先祖の家系を唱へよと或者曰く我は是れ某帝幾世の末裔或者は我は是れ某大臣の子と既にして桃隱の番に至る桃隱振威一番大聲して曰く我は是れ大覺世尊幾世の孫姓は釋諱は玄朔桃隱と號すと(衆角多しと雖も一麟足れり)即ち躬を擧けて一跳し即日東福を去て日峰の室に入る敕を受けて法山に位し又勢州の大樹を開き特に眞道大澤禪師の徽號を賜ふ也た是れ關山門下の老宗匠なり

三界の導師

快川國師初め美濃の一寺に住す城主齋藤龍興豪慢にして僧道を凌辱す(錯)國師即ち語を唱へて曰く龍興は一國の城主老僧は三界の導師豈に一國の狹少を以て三界の廣大に方へんやと(錯)和歌を打して曰く「三界にはゞかるほどの會下笠をさして美濃には執心もなし」(錯)蕊直に美濃を去る(錯々々然りと雖も又是れ好軌)

鎗下の遊戯

太田道灌文武の材あり初め龍穩寺の泰叟禪師に參じ禪要を問ふ師授くるに瑞岩主人公の話を以てす

(隨處に主となれば立處皆眞なり葛藤を用ゐて何にかせん)道灌工夫を凝すこと殆んと二年なれとも更に省悟なし(大器晩成更に參せよ三十年)一日越生に遊ひ途に旅客と同伴し往く〳〵語り且つ問ふ(恁麼の時主人公何の處にか在る)曰く子は何處の人ぞ客曰く京都(實頭の漢)道灌曰く彼の山川當國と如何客曰く唯た鐘聲の異なるあるのみ(舊公案天下の人顧るなし)道灌忽ち言下に大悟す(畢竟此の何をか大悟す)馳せ歸て泰叟禪師の室に入り所悟を呈す(裏に一物の尊親に呈すへきなし)師問ふて曰く即今主人公

何の處にある道灌曰く山は月樓の鐘に答ふ師乃ち之を印可す(此錯彼錯)後ち上杉定正の邸に到る定正道灌をして入浴せしめ武夫數十人に命じ各刀鎗を取りて其不意に乘じ之を圍み迫て曰く汝平日和歌を好む是時如何(虎口裡に身を横ふ)道灌從容として曰く(逆水の波義を見て爲さるは勇なきなり)かゝる時さこそ命の惜からめかねてなき身とおもひ知らずば(恁麼の閑言語半文錢に當らず然りと雖も鳥の將に死んとするや其聲悲し人の將に死んとする其言や善し)

殺活の靈劍

澤庵和尚一日劍客柳生但馬守宗矩の邸を訪ふ(金毛の獅子跳て窟を出づ)家臣等師の弊衣破笠を見て甚た之を賤み拒むこと再三師頑として退かず强て面晤を求め且つ宗矩と一刀立合んと乞ふ(賊々此老賊)宗矩は當時將軍の師範役にして劍道に於ては天下に敵なし(謂ふこと天下に敵なしと覿面是れ什麼ぞ)然るに僧の身を以て吾と試合を要求すること奇怪なり一擊の下之を粉碎せん(蓋し膽毛ありと雖も且つ人を試る眼なし惜むべし惜むべし)道場に導き己

も用意して道場に入りいざ立ち合はんとするに師少しも騒かず(踞地金毛の獅子)徐ろに宗矩に問ふて曰く聞く足下劍法に於て海内敵なしと今若し二人同時に足下に向て降刄せば如何宗矩曰く研りまくらん師更に問ふ四人同時に降刄せば如何宗矩曰く研りまくらん斯の如く師問ふ毎に其數を倍加して終に百人二百人の衆敵を以て問ひしかば宗矩勵聲一番曰く研り拔け去らんのみ(獅子一吼すれば野干腦裂す到頭此僧に一勘破せらる)師聲に應して呵々大笑(此笑聲天地分碎す)扨て聞きし程にもなき柳生

殿の劍かな一人二人は研りまくるも百人二百人となれば研り拔け去らんとば卑怯なり(重々の敗闕他に自己の鼻孔を穿却せられ尙且知らず)予は敢て劍法を學はす然れとも幾万人攻め寄せ一時に取り圍むもぬけ去らんなとの臆病心は少しも起さす蹈み止まつて之を研りまくるは掌上の塵を拂ふか如し(咄多口の阿師家醜外に向て揚くる勿れ)宗矩擬議して曰く其は如何なる劍を以て克く然るか(手忙しく脚亂れ錯を以て錯に就く)師曰く趙州の露刄劍是なり(方に思へり奇特の事あらんと元來是れ閑家具)宗

矩曰く趙州の露刃劍とは如何なる劍ぞ(是れ此の劍若し如何と問はゞ喪身失命)師曰く足下此劍を知らんと欲せば須く此一句に參すべし(金毛の獅子變して狗となる然りと雖も機を見て能くなす尙獅子に較れり)「心とは如何なるものをいふやらん墨繪に書きし松風の音」と一首の和歌を示す(老婆心切葛藤を打して什麼せん)宗矩此に於て發憤し澤庵に就て坐禪工夫して遂に劍法の堂奧を極めたり(是は即ち是只た恐くは錯て會することを)

托盤の明珠

俳人芭蕉初め深川長慶寺の佛頂禪師に參して省悟す(本來無一物此の什麼をか省悟す魚目を以て明珠となし橘皮を以て猛火となす勿れ)後竟に其の印章を受く師一日六祖五兵衛を伴ひ芭蕉の庵を訪ふ五兵衛先つ入りて問ふて曰く如何か是れ閑庭草木中の佛法(好個の一釣)芭蕉答へて曰く葉裏々葉表々芭蕉かな(定めて凡鱗に非らす焦眉の大蟲)師乃ち入て問ふ如何か是れ靑苔未生前春雨未來前の佛法(又是れ驗主問)時に蛙飛んで庭前の池中に入る芭蕉即ち一句を打して曰く「古池や蛙飛ひ込む水の音」と答ふ

(現成公案須く這の田地に到りて始めて得べし)師大に喜ひ携ふ所の如意を授け且つ筆を採りて「本分無相我是什麼物若不會爲汝等諸人下一句子看々一心法界法界一心」と書す(話兩橛となる看々とは什麼ぞ親切の處還て不親切若し山僧なれば彼か答へ未た終らさるに便ち一棒を與へん)

北山時雨

大愚和尚始め江戸の南泉寺に住す時に堀尾山城守の二妾罪を避けて南泉寺に來り大愚和尚を禮して尼となり隱れて居れり然るに城市偏く傳へて南泉に二妾を藏すとなす(是)門派も亦た其狀を列して其所以を妙心寺に訴ふ(是)茲に於て妙心寺は大愚に本山出頭を禁ず大愚その實を妙心に伸告し謗を雪かんと遂に京都に上り赤城に到る然るに乘る所の馬丁高聲に謠ふて曰く「北山時雨思ひなけれは霽れて行く」と大愚感悟して手を拍ち遂に京に上らず再ひ南泉寺に歸る此の後七年にして寛永寺天海その冤を知り之を妙心に告け不出頭の禁を解けりと云ふ(恁麼の是何れか眞の是試に甄別し看よ)

茶味と禪味

豊臣太閤曾て千利休を召して茶道を問ふ(君子は下問を愧ぢず)利休答へて曰く茶は禪と同しく膽力を錬る(仁者は之を見て仁と云ひ知者は之を見て知と云ふ)太閤其言に感し直に茶を點せしむ(奴は婢を見て怒懣)利休乃ち起ちて襖を押し開き茶器を運はんとする一刹那太閤鎗をしごき其鋩先を利休の鼻頭に突きつく(好一拶)利休此時神色自若として瞬かず徐ろに茶を點し終る(鹿を逐ふ者は山を見ず金を攫む者は人を見ず)太閤此に於て心を茶道に傾け利休に師事して其道を尋ね造次顚沛にも之れと離れす

熱心なりき(豈に啻に茶事のみならんや百家技藝に於ても亦然り)或時利休軍に從ふに甲冑を着け一兵士として自ら任す(野干獅子皮を着く)恁麼なりと雖も何ぞ如かん趙州喫茶去の簡にして要を得たるには

鋏砲と一喝

心越禪師は支那の人曹洞の高德にして定慧并ひ秀つ水戸光圀公常に大に歸依し祇園寺を建てゝ此に請す(何の心行ぞ)一日光圀公師の定力を撿せんが爲めに自邸に招き頗る饗應す酒方に酣なる時光圀大

杯を師に献じ溢るゝばかりに酒を酌む(笑裏に鋒を藏す)師滿酌之を飲まんとする際一發の砲火轟然隣室より起る然れとも師端然として大杯を傾け一滴をも漏さゞりき(鯨海水を呑み盡して珊瑚枝を露出す)光圀大に其の無禮を謝す師曰く砲火は武門の常敢て欠禮にあらすと云へり(是れ一敗)次に師大杯を擧て光圀に献す公滿酌方に呑まんとする際師忽ち威を振ふて大喝一聲す(喝聲と砲聲と大小果して如何)光圀愕然恐惶杯を顚覆し立て曰く何事ぞ(是れ再敗)師平然としく曰く棒喝は禪家の常別に怪むに足

らず。滿面の慙惶敗後に敗を添ふ然りと雖も人を試むる端的の處還て些子の香氣あり這箇の活商量心越禪師にして始めて得べし。

電光影裏斬春風

佛光國師は我か建長の第五世にして圓覺寺の開祖なり徑山無準禪師に參し此事を究明す後ち台州の眞如寺に住す時に元兵南下して宋を蹂躙す師亂を避け溫州の能仁寺に移る元兵復た來りて溫州に亂入す寺僧皆先を爭ふて奔る(泥團を弄する漢何の限りかあらん)師獨り泰然として堂中に安坐す(八風吹

けとも動せず)元兵群集し來り刀を揮ふて師の頭に當つ(過事々々)師神色少しも變せず從容偈を唱へて曰く(嗅口を合取せよ一言出れば駟馬も逐ひ難し)乾坤無地卓孤節且。喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。(果然として屎臭氣を免れず然りと雖も恁麼に快活なるを得たり恁麼に自在なるを得たり)元兵其擧動の非凡なるに驚き罪を悔悔せり(過を知て改む汝に三十棒を許す)

忍辱の淨行

越後の良寛は洞上の散聖なり夏夕庵を出でゝ芋畑の間を徜徉して凉を把る偶畑主來りて百結の衣を着けたるを見て誤て芋を盜む者なりとし大に罵て之を打つ漸くにして良寛なることを知り叩頭罪を謝す良寛之を慰め且つ謠ふて曰く「うつ人もうたるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀」(咄、始めは芳艸に隨て去り又落花を逐ふて歸る)

火裏の穩坐

甲州惠林寺の快川國師は道德共に高く武田信玄公の師傅たり敕賜大通智勝國師と稱す織田信長使を遣はし屢〻招けとも固辭して行かず(青山元動ぜず)

遂に去て甲州に來り惠林に住す信長大に怒り兵士數百人をして惠林寺を圍み(白雲自ら去來す)惡く寺僧を山門上に追ひ上げ下に薪を積みて之を焚かしむ(惜むへし玉石共に焚かる)師黑煙堆裏に兀坐して徐ろに衆を顧みて曰く汝等諸人末後の一句を道へ(眞金は須らく火裏に見るべし)衆各所見を呈す猛火將さに師の法衣に及ふ從容末後の句を擧して曰く「安禪不必須山水滅却心頭火自凉(口を開けば膽を見る聖胎玲瓏這は衲僧家尋常底の茶飯)師恬然として衆と共に燒化す信長の兵之を見て且つ驚き且つ敬

し神足一人をして師の法脈を抱きて逃れ去らしむ(悔らくは當初を愼まさることを如何せん葬事後の藥袋)

截斷生死

楠正成綸命を奉じ攝州湊川に出陣す時に正成廣嚴寺に入り明極楚俊禪師に見へ問ふて曰く生死交謝の時如何(短刀直入)師曰く兩頭共截斷一劍倚天寒(砒礪狼毒)正成曰く落處什麼生師威を振つて喝一喝す(雷聲洪大にして雨點全くなし)正成通身汗流れ起て三拜す(禮拜甚た分明)師曰く公既に徹底せり(惜むへ

し落艸談何ぞ腦を刺して膠盆に入らさる)正成曰く若し來りて和尚に相見せずんば焉ぞ向上の關棙を超出することを得ん(果然釣に上り來る若し山僧なれば彼を打て追ひ出さん)今より世々針芥を失はざらん師曰く公の問對甚た舊參の者に似たり曾て他の宗匠に參せしことありや(智人の明鑑)正成曰く曾て南都に赴く途次一僧に逢ひ往く〳〵問答して疑義を質せり僧曰く公の名は如何予曰く正成時に僧正成を呼ふ予應諾す僧曰く是れ何ぞ(牛頭を按して草を喫せしむ)予此に於て豁然大悟すこれより後此

僧に就いて垂示を受くること月あり此より以來兵を用ゐること自在なるを得たり(自屎臭きを覺へす)師曰く善哉々々多年作家の爐鞴に入り來らすんば爭てか今日あることを得む(熟睡僧語多し)正成拜謝して去る翌日敵兵競ひ進む激戰數十回正成遂に廣嚴寺の無爲庵に入り兄弟一族列坐して將に自刄せんとす正成其弟正季を顧みて曰く死して何をか爲さん正季曰く願はく七たび人間に生れて國賊を滅さん正成曰く是れ實に我か心を得たり復た何ぞ疑はん(恁麼の商量喩へば錦機を飜すか如く背面共に

是れ花)

鋏山と家康

鋏山和尚駿州の臨濟寺に住す徳川家康道を問ひ崇敬尤も厚し家康の二條城にあるや鋏山又妙心寺に住す一日家康を二條城に訪ふ紙を以て蜜柑十五顆を包みて之を呈す暄凉畢りて後家康曰く我聞く世尊は佛法を以て有力の檀越に付屬すと今日我日本の有力者は此家康に過きたるはなし請ふ妙心寺の爲めに檀越とならむ時に鋏山頭を揮て曰く謂ゆる有力なるものは公の言ふ所にあらず公の知る所に

あらず若し佛法有力を得たる者あらば山僧坐具を展へ禮拜すべし夫の佛法有力は障後の僧も亦た知る能はず(太孤絶)時に金地院崇傳長老障後に在り鋏山早く之を知れるなり蓋し此の時家康は京都西洞院以西を以て妙心に屬せんとす鋏山峻拒して旨を奉せすその意に云ふ法道淩遲は一に富奢に依る僧は淡泊にして佛法を護持すと(太孤絶)

杜牧

誰記慈明老漢婆、無能惱性麼呑蛇、工夫雪月吟魂冷、閑唱桑間濮上歌、
宗門活句阿房宮、六國興亡六國風、筆海詞林何所似、青天萬里月方中、

一休和尚

坐禪論

此に古德の坐禪論一二則を擧示す禪學乍入の諸子此に依りて得る所あらば幸甚

建長寺開山大覺禪師の坐禪論　　參學比丘　大内悅賛

夫れ坐禪は大解脫の法門なり。諸法是より流れ出て。萬行是より通達し。神通智慧の德此中より起る。人天性命の道此中より開く。諸佛已に此門より出入し。菩薩は行して此門に入る。二乘は猶半途に在り。外道は

行すと雖も而も正路に入らず。凡そ顯密の諸宗此法を行せずして佛道を成するものはあらず。

問て曰く坐禪は諸法の根源なりと意旨如何。

答て曰く禪は佛の內心なり。律は佛の外相なり。教は佛の言語なり。念佛は佛の名號なり。是れ皆佛心より出づ。この故に根本とするなり。

問て曰く禪法は無相無念にして靈德露はれず。見性も也た證據なし。何を以て之を信すべきや。

答て曰く自心と佛心と一味なり豈に靈德に非らずや。我心我知らずんば何を喚てか證據となさむ。

即心即佛の外何の證據をか求めむ。

問て曰く能く一心の法を修すると。又萬行萬善を修すると其功德果して優劣ありや。

答て曰く「頓覺了如來禪六度萬行體中圓」と然る時は禪の一法に一切の諸法を備へたり故に「三界唯一心心外無別法」とも云ふなり。縱ひ萬行を修するとも心法を知らざれば悟を得へからず。若し悟を得すして成佛すとは其理りあるべからず。

問て曰く此法は如何か修行すべきや。縱ひ修行を爲すとも開悟ることを得ざれば。成佛不定なり。若し

不定ならば修行すとも何の益かあらむや。

答て曰く此宗は甚深微妙の法門なり。若しひとたび其事に觸ることあれば長く菩提の勝因となる。古人曰く此を聞て信せざるものも福人天に超ゆ。學ひ得さる者も終に佛果に到る云々」此法は佛心宗なり。佛心本より迷悟なし。正しく如來の妙術なり。縱ひ悟を得すと雖も。一座の坐禪は一座の佛なり。一日の坐禪は一日の佛なり。一生の坐禪は一生の佛なり。未來も亦此の如し。只此の如く信ずるものは是れ大機根の人なり。

問て曰く若し是の如くなれば我も亦修行すべし。いかにせは安心しいかにせば用心することを得へきや。

答て曰く佛心とは。一切の相に着することなく相を離るゝを以て實相となす。行住坐臥四威儀の中坐を以て安穩の義となす。之を端坐思實相と云ふなり。

問て曰く端坐思實相の義とは如何微細に之を說明せよ。

答て曰く端坐とは如來の結跏趺坐を云ひ。思實相

とは乃ち坐禪なり。法界定印を結んで身心動せず。眼は半目を開き。鼻端を守て當に一切有爲の法は如夢幻泡影と見るべし。念頭に繫くること勿れ。

問て曰く足を結ふは如來の威儀なり。半目を開きて鼻端を守るは何事そや。

答て曰く眼を開て遠く見れば。紛飛の境に侵されて心散亂し。目を塞さげば又昏沈の境に落ちて。心中明ならず。眼を半目開く時は。念々念々ならず。身心一如して。明察なる時は生死煩惱近傍すへからず。之を名けて立地成佛大機大用と云ふなり。

問て曰く此の如きの事を聞くと雖も。尙以て信心及ひ難し。經呪を讀誦して其功を積み。持齋持戒して名號を唱ふれは其德を累ねて專ら憑あり。只何事をもなさすして坐禪せば何の奇特かありや。

答て曰く此の如き疑をば生死の業と云ひ又は煩惱とも云ふなり。一切の法を行じて所得の心なきを名けて甚深般若となす。般若とは智慧なり。此の智慧は能く生死の根源を切る利劍なり。善根を修して其果報を願ふは凡夫の迷なり。菩薩は善根を修して其果報を求めず。大慈大悲に向て善根を修

するか故に。菩提の資とするなり。果報を願ひ善根を修し。人天の小果を成ずる人は定めて生死の業なり。

問て曰く善根の功德を聚めすむば。爭てか萬德圓滿の佛を成すべきや。

答て曰く善根功德を聚むれば。三大阿僧祇刼を歷て當に成佛すべし。又因果不二の法を行すれば一生に成佛するなり。自心を明らめ自性を悟る人は。自己本來の佛を見るなり。今始めて成佛するにあらず。

問て曰く見性成佛の人は因果に憑らず。善根を修せざるや。

答て曰く見性成佛の人。善根を修して利益を爲すと雖も果報の爲めにせず。衆生を敎化するか故に因果を敎ゆるなり。我身の爲めには所得なきが故に。功德に憑らすして一切無心なり。

問て曰く無心と云ふは如何。若し一向に無心ならば。誰れか見性し。誰れか悟道し。誰れか又說法敎化を爲すへきや。

答て曰く無心とは一切愚痴の心なきを云ふ。邪正

を辨ずる心を云ふにあらず。我衆生を思はず。又佛を望まず。又迷を思はず。悟を求めず。人の尊敬にも從はず。名聞利養をも求めず。毒害怨讎をも厭はず。一切の善惡に付て差別の念を起さゞるを無心の道人と言ふなり。故に曰く道無心合人。人無心合道。

問て曰く持齋持戒して經呪を讀誦し又は名號を唱ふる功德勝劣ありや否や。

答て曰く持齋は貪欲を離れて來生に當に大福德を得べし。持戒は又惡心を休め善心を生せむか爲めなり。善心ある者は人天の中に生して位尤

も高し。經呪を讀むものは佛法を護持する故に此人來世に當に大智慧を得へし。名號を唱ふれは佛に歸するか故に當來に必す佛土に生ずるなり。又此無心と云ふは佛心なり。佛心の功德は言語も及ふこと能はず。思量も到ること能はず。實に不可思儀なり。

問て曰く此の如きの善根は面々に其功德疑なし無心の功德は尙以て不審なり乞ふ明示あれ。

答て曰く佛の威儀を學ひ。佛の言語を傳へ。佛の名號を唱へて功德あらは。又是れ無心の道人にも功

徳あるべし。若し無心に功徳なしと言はゞ餘行も亦功徳あるべからず一切の善根功徳は天上人間の因縁なり。無心は即ち是れ頓證菩提の道なり。功徳は之を論するに足らず。實に一大事因縁なり。生死煩惱も自ら消滅して身心一如なり。即心成佛何の疑かあらんや。古人曰く供養三世諸佛。不如供二難一無心道人實に是れ唯佛與佛の境界なり。凡夫二乘の側るへき處にあらさるなり。

問て曰く諸教には無心と説かず。亦讃嘆せず。何に由て宗門に之を貴ふ乎。

答て曰く諸教にも其説なきにあらず。或は言語道斷と説き。或は不可説と云ひ。或は畢竟空。或は一大事因縁。或は又諸法寂滅と説く。釋迦室を掩ひ。淨明口を閉つ。是れ豈に無心を示すにあらずや。影響の菩薩は已に證智するが故に。佛之を説き玉はず。二乘は及ひ難き故に佛又之を説き玉はず。故に法華經に曰く無智人中莫説此經と此意なり。諸教に八万四千の法門ありと雖も。色空の二法を出てず。一切形相あるものは皆色なり。形相に顯れさるものは皆空なり。身は形あるか故に色と云ひ。心は形な

きか故に空と云ふ。一切の經は此色空の二法を離れず。是れ不可說にして無心の境界なり。此の故に斯の事を讃嘆せず。言語も及はさるか故に敎外別傳と云ふなり。此身を迷となすへき乎。又悟となすへきか。

問て曰く又心は是れ何物ぞ迷悟の根本を知らざるへからず。又心は身內に在るか。心外に在るや。何れの處より起るや。

答て曰く四大五蘊の色身十方に遍滿して一切衆生を根本となす。因緣和合する時は身體を建立す。

之を生果報と名ずく。遷謝する時は四大分散す。之を死と名く。色相は凡聖あり。心躰は迷悟なし。然りと雖も假りに迷へるを衆生と名け。悟るを諸佛と名く。迷悟は只妄心に因る。眞心には迷悟なし。生佛は本と一心の迷悟に因る。本性を悟る時は畢竟凡聖の差別あることなし故に首楞嚴經曰妙性圓明離諸名相無有本來世界衆生。

問て曰く心性には本と迷なし。若し然らば迷情は何れの處より起るや。

答て曰く妄念若し起れは迷隨て來る。迷來るか故

に煩惱も亦生ず。妄念若し滅すれば迷乃ち去る。迷去るか故に煩も亦滅す煩惱は生法なり。生死の種となる。菩提は滅法なり寂滅の樂となる。迷ふ時は諸法皆煩惱なり。悟る時は諸法皆菩提なり。世人此の迷悟の根本を知らず。生死の念を壓へて起さゞるを一念不生と思へり。又是れを無心となす。猶是れ生死の念なり。無心にあらず。寂滅にあらず。念を以て念を息むれば生死相續なり。

問て曰く小乘は空理に墮して無心を知らず。大乘の菩薩は此の無心を得へしや否や

答て曰く菩薩は十地に至て猶ほ惑智の二障あり。故に無心を得ず。一に惑障と云ふは第七地に至るまで求法の心あるか故に。障となる。第十地に至りて覽照の心あるか故に障となす。成等正覺の時に至て此の無心に合ふ。

問て曰く菩薩も尙ほ十地に至るまて之を知らす。初心の學人爭てか無心に合ふへきや。

答て曰く大乘は不思議なり。直に一念の根源を截て。頓悟するもの是れあり。教家に三賢十聖の位を立つることは。鈍根機の爲めなり。利根の人は初發

心の時便成正覺として直に成佛するもの是れあり。十地等覺に至て無心に合ふも即今見性成佛すると無心の理は差別あることなし。

問て曰く見性成佛と云ふは如何なる道そや。性と云ふは何物ぞ。見と云ふは如何なる見ぞや。智を以て知るへきか。目を以て見るべきか。如何。

答て曰く經論を學んで得る智は。見聞覺知の分別の智なり。此の修行には之を用ひず。回光返照して本有の自性を短見するを慧眼と名く。見性の後は見聞覺知をも亦受用すべし。

問て曰く本有の自性を知見すると云ふ知見は知るべし。本有の自性と云ふは如何。

答て曰く一切衆生は。本來性あるか故に自體を扶起す。此性は無始よりこのかた不生不滅無色無形常住不變なり。之を本有の自性と名く。此の自性は一切の成佛と一味平等なるか故に。佛性と名く。一切の三寶も。六道の衆生も。此性を以て根本となして一切の法を成就するなり。

問て曰く回光返照と云ふは如何。

答て曰く外の諸法を照す自己の光明を回らし返

して。內の自己を照すを云ふなり。心明かなることを日月の光の如く。無量無邊にして內外一切の國土を照すなり。光の及はざる處は闇し是を黑山の鬼窟と名く。一切の鬼神其內に住す。鬼神は能く人を害す。心法も亦復た此の如し。心性の智光は無量無邊にして一切の境界を照す。光の及はざる處は闇し。是を無明の陰界と名く。一切の煩惱其內に住す。煩惱能く人を害す。智心は光なり。妄念は影なり。光の物を耀すを照と云ふ。心念の境界に遷らずして本性に向ふを。回光返照と云ふ。又は遍照とも云ふ

なり。遍照の當體は迷悟未た露れざる處なり。今時の人は妄念を以て本心と思ひ。煩惱を以て樂とな す。何れの時か生死を離れんや。

問て曰く坐禪は一念不生を以て省要となす。念を以て念を止むれば即ち是れ血を以て血を洗ふに似たりと如何。

答て曰く一念不生は謂ゆる心法の本體なり。念を止むるにもあらず。又念を止めさるにもあらず。但た是れ一念不生なり。若し此の本體に合ひぬれば。是を法性の如來と名く。然る時は坐禪も亦無用な

り。迷もなく。悟もなし。豈念あらむや。若し此本體を知らすんば不生を得へからず。縱ひ念を押へて起さずと雖も皆是れ無明なり。譬へば石の草を壓して久しからすして又生ずるか如し。綿密に工夫すへし容易なるべからず。

問て曰く或人云當向一生不生處如何。

答て曰く一念不生とは全く生滅去來の相なきを指示する語なり。生死とは念より起る。若し念の起る處を知らすんは。生死の根本を知るへからず。衆生は十二時中煩惱の念に使はれて。本有の性に背く。若し復た妄念の雲晴れて心性の月彰るれは以前惛む所の念還て皆智慧となる。乃ち此念を以て說法し衆生を教化すへし。古人云く諸人被使十二時我使得十二時。

問て曰く坐禪の時は念の起るも過。止むるも亦過と云ふ意如何。

答て曰く。未た見性せさる時は起るも、止むるも皆過なり。佛經に說不起妄念も。或は說亦不息滅。皆是れ本性を知らしめんか爲めの語なり。本性を知る時は修行も無用なり。迷悟の病を除く時は療治も

無益なり。然りと雖も迷情の病起る時は。修行の療治を用ゆ。念起るは病續かさるは藥なり。

問て曰く縱ひ念起ると雖も念には自性なし。何の過かあらむや。

答て曰く自性なしと雖も起れは便ち過あり。猶ほ夢中の事の如し。覺めて後其の虛妄なることを知る豈に過なしと云はんや。過を起し夢を成すは衆生の妄見なり。一且佛法を聞て信心を起すは殊勝の事なり。然りと雖も眞實の道心なき人は工夫疎なるに由て心の過を知らず。偶々小々の念を押せ

とも大々の念を知らず。若し根源を截らずんは。縱ひ結緣の分あれども生死を出離することは難し。

問て曰く一切善惡都莫思量云云。善惡に付て思量することなきを尤も坐禪の用心となす。小々大々の念と云ふは如何。

答て曰く一切の善惡都て思量することを莫れと云ふは。直截の語なり。坐禪の時ばかり之を用ゆへきにあらず。若し此田地に到らば。行住坐臥皆禪なり。必すしも坐相を執せず。祖師曰く行亦禪坐亦禪。語默動靜躰安然と。經に曰く常在於其中經行若坐臥

云云と。小々の念と云ふは目前の境界に付て俄かに起る念なり。大々の念と云ふは。貪欲。嗔恚。愚痴。邪見。嬌慢。嫉妬。名聞。利養。等の念なり。坐禪の時志の薄き人は小々の念を收むと雖も。此の如き惡念覺へすして心中に在り。之を名けて大々の念と云ふ。此惡念を喜捨する、を直に根源を截ると云ふなり。直に根源を截るときは煩惱も菩提となり。愚痴も智慧となる。三毒も三聚の淨戒となり。無明も大智法性となる。いかに況や小々の念に於てをや。佛語に若能轉物即同如來と云ふは此の意なり。但た能く

物を轉ずべし。物に轉せらるゝこと勿れ。

問て曰く若し能く物を轉すれば即ち如來に同しと云ふは。物とは何物ぞ。轉するとは何事ぞや。

答て曰く物とは万物なり。轉するとは躰脫なり。物を轉するとは一切の境界に就て。心を遷さすして返て本性に向ふを云ふなり。然るときは境。心を礙へず天魔。鬼神。煩惱。生死。も便りを得べからす。之を物を轉すと云ふなり。佛見。法見。尙以て截るべし。いかに況んや妄念をや。截る心も念の心に似たれとも是れは正念なり。正念は慧念と名けて之は正見

に入る智慧なり。

問て曰く煩惱も菩提も一心より起ること分明なり。何れの處より起り始むるものなるや。

答て曰く色を見たり。聲を聞き。香を嗅ぎ。味を嘗め。觸を覺へ。法を知るは六根の德用なり。此境界に付て善惡を分ち。邪念を辨する底の智慧なり。此に於て人我を立て。愛憎を起すは皆妄見なり。此妄見に依て着相を成すを迷と名く。此迷ひより色受想行識の五蘊を起すなり。之を煩惱と名く。煩惱を以て衆生の身體を建立するか故に。殺生。偷盜。邪婬。妄語

等の惡行を好むて終に三惡道に墮す。皆是れ妄念より起るなり。此妄念纔かに起る時は直に妄念を轉して本性に向へば即ち無心となる。已に無心に安住することを得れば五蘊の身即ち五分法身の如來となる。是れを應無所住而生其心と謂ふ。是の如く用心すれば修行の大用なり。

問て曰く久しく坐禪の功を積むて工夫純熟する人は。煩惱邪迷の心有るへからず。始めて修行する人は爭てか煩惱を盡すへきや。

答て曰く煩惱をも厭はず。只た心を淨むへし。古人

云學道須是鐵漢着手着心頭便判直趣無上菩提一切是非莫管と。手を心頭に着くるとは心の邪正を批判し。心の誤を知る可し。之を智者と名く。若し智慧ありて迷なければ。譬へば。昔より日月の光を入れざる闇穴に燈を入るゝか如し。昔しの闇きは外邊に去らされども俄に明となる。之れと同しく無明煩惱の闇は智慧の光を得れば。去ることを待たすして而かも去るなたり。又夜は虛空闇し。然れとも日光現するときは其虛空晝となつて明なり。心法も亦た此の如し。迷は闇なり。悟は明なり。智慧の

光照す時は煩惱の暗忽ち明となる。菩提別に二法あることなし。

問て曰く煩の闇を照すことは智慧の力に依る。智慧なくして菩提有るべからず。然る時は如何か此智慧を得へきや。

答て曰く自己の智光は自ら明々たり。然れとも妄想に覆はれて之を失ふ。此故に迷を起すなり。譬へば人の夢を見る時何事も眞實の相を爲す。覺めて後一事も無きが如し。夢の如くなる妄想覺めて後之を見れば本より之あることなし。衆生は迷へる

故に妄を以て實と爲すなり。

問て曰く悟とは日比知らざる事も俄かに之を知り。又過去未來の事も知るへきや否や。

答て曰く妄見皆盡くれば大夢俄かに覺て。佛性を知見することを得。之を大悟大徹と名く。是れは思量分別を以て測るへからさる處なり。過去未來のことを知るは神通力なり。そは修行の勳力に依る。大悟と謂ふにはあらず。天魔鬼神外道仙人等皆是れ神通あり。曾て昔し難行苦行を修せし德なり。此德ありと雖も邪見を離れざれば。佛道に入ることを得ず。

問て曰く悟道得法の人神通を具せば何の德用かあるや。

答ふ此身は過去の愚迷を以て建立するか故に。縱ひ見性成佛の人と雖も神通露れず。然れとも悟るときは。六塵を透脫し。生死を截斷する故に。自ら是れ神通妙用を具足す。是れは外道天魔の有漏の神通力にわあらざるなり。豁然大悟の人は三大阿僧祇劫を經すして。頓に佛道を成ず何そ別に神通妙用を論せむ。

問て曰く見性成佛と。即心即佛と差別ありや否や。

答ふ即心即佛とは直に心外に佛なきことを示すなり。若し直に此旨を承當せば。伶俐の人なり。或は又非心非心とも之を示すなり。見性成佛とは自性を知見して。衆生の命根を截斷して妙性圓明なることを了知す。然るときは生死もなく。煩惱もなし故に假りに名けて成佛となす。佛とは覺なり。從來迷はざることを覺了す。同異なしと雖も入門差別あるに似たり。この故に一は見性成佛と云ひ。一は即心即佛と云ふなり。

問て曰く性は常住不變にして諸佛と衆生と一味平等なり。然れども迷へる衆生は生死の苦あり。然るときは一味平等と云ふことを得さるなり。

答ふ一味平等とは智慧の照す處なり。愚痴の所見にはあらす。祖師の言句は門を扣く瓦子なり。未た門に入らさるときは見性成佛の語は至極なり。此門に入得すれば一切の相を離る。故に成佛も亦た得ることなし。

問て曰く顯密の諸宗皆敎理智斷行位因果の八法ありや。二乘聲聞は四禪八定を修して火水風三災の難

を離る。色受想行識を空して無餘涅槃に入る。菩薩は三聚の淨戒を持して慈悲萬行を修し三賢十聖の位を經て內外の煩惱を斷す。若し煩惱なき所佛界ならば何に依て。三世の諸佛は眞如法界を出でゝ。生死の欲界に來ることありや。

答ふ諸佛菩薩は。衆生を利益するを以て能作となす。若し衆生を利益せすんば佛菩薩にあらず。三乘は衆生を利益せざるか故に。大乘には是を解脫の深坑に入ると云ふ。三賢十聖の菩薩は修行增進して重玄門に入り。衆生を度せんか爲めに。寂光の樂

土を出でゝ。五濁惡世に來り。菩提樹となる。譬へば高原陸地に蓮華を生ぜず。卑濕淤泥に蓮華を生ずるか如し。又農人の稼穡を事とするか如し。淨潔乾燥の地には苗稼を植ゆること能はず。卑濕淤泥に不淨の糞を置て米穀の種子を植へ。因緣時到て陽氣動き。甘雨潤をし。萠芽長じ。根莖枝葉は繁榮茂盛して後稻粱穀米等成熟し。農業の事終て昇平の歌を唱ふ。諸佛の出世も亦此の如し。碧落青霄には佛法を建立すること能はず。五濁惡世の穢土に蕪弊垢膩の衣を着けて。惡業煩惱の衆生を誘引し。應機

說法して正因の種子を下だすなり。因緣純熟して。慧日照し。慈風扇き。法雨を瀉き。甘露を降し。道芽萌ざし。枝葉蔚茂し。根莖成長して。菩提樹を生じ。等覺の華を開き。妙覺の果を結ひ。化導成滿して。涅槃常樂の妙法を唱ふ。道人も亦一株の血木の如し。土に六塵の糞を置き。生靈の種子を下たし。色身の苗を植へ。性智の芽を萠さし。心念の根を根じ。意想の莖を長じ識神の枝を抽でゝ。情欲の葉を茂らし。樂の根株を成じ。智見の花を開き。覺悟の實を結ひ。道業事終へて無心の樂を唱ふ。凡夫も亦一株の木あり。

愚迷薄地にして貪愛の糞を置き。無明の種子を下だし。五蘊の苗を植へ。業識の芽を萌ざし。執着の根を生じ。人我の莖を長じ。諂曲の枝を抽て。嫉妬の葉を茂けらし。煩惱の樹を成じ。妖艶の花を笑き。三毒の果を結び。名利事終へて五欲の樂を唱ふ。且らく道へ此の三株の木を把て。根に和して一時に拔き出して。無陰陽の地に栽培し。直に無影樹となして當に大力量の人となるへし。天地と我と同根。萬物と我と一體なり。且らく道へ我れは是何物ぞ。若し喚て佛となさば天地遙かに隔るなり(完)

大覺禪師遺戒五條

一　松源一派有僧堂規專要坐禪其餘何言千古不可廢之。廢則禪林何在。宜守行。

二　福山各菲不論濟洞。輔弼和合莫味佛祖本宗。

三　戒是僧體。不許葷酒肉臭鬻門前何況入山中

四　參禪學道非四六文章。宜參活祖意。莫念死話頭。

五　大法莫授非器。吾宗榮衰唯在於此矣。

山僧遺訓無他事。屬々。

住山蘭溪道隆白。

中峰和尚坐禪論

坐禪は別に用心の處なし。只た十二時中一切塵勞妄想の境を放下して。常に自心をして虛空の如くならしめ。毫髮ばかりも他念なからしむ。若し自心清淨を得れば。還て不思善。不思惡。正當與麼の時如何なるか是れ我父母未生已前本來の面目と此の如く看よ。若し工夫一片とならば自然に悟入することを得べし。何をか坐禪と名く。外一切善惡の境界に於て心念の

起らさるを名けて坐となし。內自性を見るに動せさるを名けて禪となす。如今の學道人は此心體を悟らすして便ち心上に於て心を生じ。外に向て佛を求め相に着して修行す。皆是れ惡法にして菩薩の道にあらず。

參禪不求名。參禪不爲利。參禪不涉思。參禪不解義。參禪只參禪。禪非同一切。參到無可參。當知禪亦戲。

參禪緣底事。獵縣更遊州。但覺千山曉。那知兩鬢秋。工夫增執縛。學問長輕浮。逗到龕帷下。淸燈照古愁。

參禪何太急。東去又西馳。走殺天眞佛。進回小厮兒。空中施棒喝。靴裏動鉗鎚。縱有神僊訣。難敎出水泥。

（中峯廣錄）

法燈國師の坐禪儀

先初心の人は念起坐禪と云ふことを心得へし其初を能く〳〵見るに晴れたる天に始めて雲の起るか如し總て其由來なし只た晴々たる虛空の如し譬へは眞心は虛空の淸淨なるか如し妄念は万像の顯るゝか如し心は即ち躰なり大樹根本の如し念は即ち用なり、枝葉花菓色香に似たり。是心すへて色形なり。然れは華嚴經に淸淨法界心と說たまふ。又三界唯一

心心外無別法と說たまふ。又心は工みなる畫師の種々の彩色を作すか如しと說きたまへり。一切は一心より生す。生滅の始終なし。故に有と說き無と說く。虛空の如くなる心中より善惡の法起るなり。十界に六凡四聖の相わかれたり。六凡とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上なり。四聖とは聲聞緣覺菩薩佛なり。諸法弘しといへいも之を過きす。皆衆生の心中よりあらわれ出るなり。心は色も形もなけれとも。その念のおこるに隨て地獄天堂の相。菩薩佛のへたてありたとへば嫉妬の心ふかき女の執心かねたむ所の家へ行き

蛇とあらわるゝか如し。万念か万の形を造り出して種々の苦をうくるなり。是を以て知るべし。一切は唯た心の作り出すことを。然れとも。念を以て生する法なれば。終には滅するなり。故に云く。諸法は夢の如く。幻に似たりと。夢幻には眞なければ始なく終なし。外緣の境界に向て善惡の法おこれども。起る源を尋ぬれは。其實は始もなく終りもなし。念の起るに隨て。十界の相あれども滅して後は夢覺て何もなきか如し。夢の事實なけれども。天堂を夢みては悅びたのしみ。地獄をゆめみては苦みたへかたし。念の起るは夢を

見始むるか如し。故に佛も生死は夢の如しと宣たまへり。衆生は常に悪夢のみ見て三途八難の苦をうくるなり、諸佛は夢の起る源を知りたまひて。悪夢を見玉はす。之を無念無心と云ふ。心なければ生死なし心なければ種々の法おこることなし。此心の源を知るを見解とも悟道とも。生死を出離するとも。解脱とも。世尊とも如來とも成佛とも云ふなり。夢のさめざるほどは有心有念と思へとも。さめて見たればみな虚なり。佛と思ひ衆生と思ひ悟と思ひ迷と思ひ有と思ひ無と思ひたる其源を悟り得れば。又無念無心と云

へきものもなし。其時始めて知る虚空の如く。清淨なることを。虚空は始もなく終もなく又中間もなし無の中には清淨もなく垢穢もなし法として取り定むへきも者なし。只虚空の中に日月の現はれたるか如し、万物は眞の法にはあらず。本來歴然として有なり。之を古人如何か是れ佛法と問へは庭前の柏樹子と答へ。又柳は緑。花は紅とも答へたり。左あらばとて是こそ佛法よと取り定むべき法なし。然れは古人は。把住せんとすれば。雲谷口に横はり。放行せんとすれば。月寒潭に落つと云へり。是の如き事を我も疑ひなき

よふに。見明めんと思ふ志ふかき人を道心者とも佛法者とも。禪門者とも入道者とも坐禪者とも云へり。是の如く志深き人は。万人か中に一人も少なかるへし。此の疑ひ破れさる人を凡夫とも。愚者とも。生死に流轉すとも云ふなり。かなしきかな明日を知らす身を惜みて永く生死の闇に迷ひ。いつを限りと云ふ事もなく六趣の夢をのみ見居たること。誠に愚なるかな。然れは釋尊は位をすてて此法を悟り玉ふ。達磨は寶珠を捧けて此法を明め。慧可は雪に立ち臂をきつて此理を得たり。志深けれは刹那にあきらむるなり。

生々世々寶を惜みて今まて生死の闇はれず。此たび佛法に逢ひ。知識に逢ふとき。身命財を捨てず。世上の營みのみ作さば。永劫多生又此の如くならむ慎むへし。坐禪の趣き大方之れに過くへからず。只生死の疑を開かんこと。道心のあるとなきとのかはりなり。男女によらず。貴賤を撰ばず。只身を捨てゝ此大事を勤むへき志だにあらば。悟を得ることは掌を返すか如くなるへし。悟りかたきことを歎くへからず。曠劫多生の間志淺く道心おこらさることを歎くへし。我心ながら拙きかな。口惜きかな。如何せむ誰をか恨みむ。

願くは世路を捨て道心を起すべし。此を思へ。此を思へ。

參禪參不盡。參盡若爲論
鶴放青松塢。牛尋碧水村
雨深苔蘚路。雲掩薜蘿門
更覓禪參者。歸家問世尊

（中峯廣錄）

鎌倉禪話 畢

明治四十一年二月廿六日印刷
明治四十一年三月三日發行

定價金五拾錢

相模國鎌倉大本山建長寺
專門道場內
編輯者 大內悅贊

東京市京橋區日吉町四番地
發行者 渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町四番地
印刷者 齋藤剛

東京市京橋區日吉町四番地
印刷所 民友社

東京市京橋區日吉町四番地
發行所 民友社

專門
建長寺
道場

大賣捌所

東京芝露月町　鴻盟社

芝愛宕町二丁目　佛教新聞社

芝區赤羽橋　森江書店

神田區お茶の水　光融館

京都本屋町二條　貝葉書院

民友社出版書籍目錄

（明治四十年五月改正）

（一）本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等か事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし

（二）斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし

（三）注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし

《明治二十年二月創立》

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

電話新橋二八五〇番

千代のひかり

定價郵税共　金五十錢

右は　天皇陛下御製　皇后陛下御歌を世にもめでたき久我從一位東久世樞密院副議長の筆蹟其儘精巧なる木版に彫刻し特別なる技術を以て上等美濃紙六十頁に印刷し製本清雅高尚にして眞に國民の一本を珍藏す可き稀品也

東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

大賣捌所

東京芝露月町　鴻盟社

芝愛宕町二丁目　佛教新聞社

芝區赤羽橋　森江書店

神田區お茶の水　光融館

京都本屋町二條　貝葉書院

民友社出版書籍目錄

（明治四十年五月改正）

（一）本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等か事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし

（二）斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし

（三）注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし

《明治二十年二月創立》

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

電話新橋二八五〇番

千代のひかり

定價郵税共　金五十錢

右は　天皇陛下御製　皇后陛下御歌を世にもめでたき久我從一位東久世樞密院副議長の筆蹟其儘精巧なる木版に彫刻し特別なる技術を以て上等美濃紙六十頁に印刷し製本清雅高尚にして其に國民の一本を珍藏す可き稀品也

東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

國民叢書

德富猪一郎著

◎第二天然と人　定價四十五錢　郵稅二十錢
◎讀書餘錄　郵定價四十五錢
◎第七日曜講壇　定價四十錢　郵稅二十錢
◎第六日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎第五日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎第四日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎近時政局史論　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎第三日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎第二日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎教育小言　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎人物偶評　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎處世小訓　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎日曜講壇　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎生活と處世　郵定價二十五錢

◎社會と人物　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎世間と人間　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎漫興雜記　郵定價四十五錢　郵稅二十錢
◎文學漫筆　郵定價四十五錢　郵稅二十錢
◎寸鐵集　郵定價四十五錢　郵稅二十錢
◎單刀直入錄　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎經世小策（上下各）　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎家庭小訓　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎風雲漫錄　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎第二靜思餘錄　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎天然と人　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎文學斷片　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎靜思餘錄　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎青年と教育　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎人物管見　郵定價四十錢　郵稅二十錢
◎進歩乎退歩乎　郵定價二十錢

蘇峰雜著

◎七十八日遊記　定價一圓六十錢　郵稅十錢
◎吉田松陰（肖像入）　郵定價五十錢　郵稅六錢
◎新日本之青年　郵定價二十錢　郵稅四錢
◎誕生日（德富猪一郎編纂　久保田米僊畫）　郵定價十五錢　郵稅四錢

蘆花生編著

◎小說不如歸　上製　郵定價六拾錢　郵稅三十五錢
◎小說思出の記　上製　郵定價壹圓　郵稅六十五錢
◎青蘆集　郵定價二十五錢　郵稅四十錢
◎自然と人生　上製　郵定價五十錢　郵稅六十五錢
◎外交奇譚　郵定價二十五錢　郵稅四十錢

◎探偵異聞　郵定價二十五錢　郵稅四十錢
◎世界古今名婦鑑　郵定價二十五錢　郵稅四十錢
◎青山白雲　郵定價二十五錢　郵稅四十錢
◎歷史の片影　郵定價二十五錢　郵稅四十錢

櫻痴居士著

◎幕末政治家　郵定價三十錢　郵稅四錢
◎懷往事談　郵定價二十錢　郵稅四錢
◎幕府衰亡論　郵定價三十五錢　郵稅六錢

時務叢書

◎國民と人物　郵定價二十五錢　郵稅四錢
◎時務三論　郵定價十八錢　郵稅四錢

◎二十世紀新論十種　定價四十錢　郵稅四廿五錢
◎近時の外交　定價四十錢　郵稅四廿五錢

家庭科學

◎第一編動物のはなし　定價四十五錢　郵稅二十錢
◎第二編天文のはなし　定價四十五錢　郵稅二十錢
◎第三編植物のはなし　定價四十五錢　郵稅二十錢
◎第四編地文のはなし　定價四十五錢　郵稅四十五錢
◎第五編鑛物のはなし　定價四十五錢　郵稅四十五錢
◎第六編天氣のはなし　定價二十錢　郵稅四十五錢
◎第七編少年物理全三冊　定價一冊拾五錢　郵稅一冊二錢

教育書類

民友社譯述
◎米國現時の教育　定價貳圓五十錢　郵稅四十錢

柴田柴一郎著
◎實踐進德篇　定價四十錢　郵稅四十錢
浮田和民著
◎國民教育論　定價四十錢　郵稅四十錢
塚越芳太郎著
◎成功論　定價三十錢　郵稅六十錢
浮田和民著
◎帝國主義と教育　定價十五錢　郵稅二十錢
山路愛山著
◎立身錄　定價二十錢　郵稅四十錢
年青
慶應義塾田中一貞譯
◎修養論　定價二十錢　郵稅四十錢

式典書類

土方伯　內外交際
◎新禮式　田中子爵譯　平田久編　定價三十五錢　郵稅四十錢
宮內大臣題辭
◎宮中儀式略　平田久編　定價一圓

十二文豪

塚越芳太郎著
◎號外柿本人麿及其時代　定價三十錢　郵稅四十錢
濱田佳澄著
◎號外シエレー　定價二十五錢　郵稅四十五錢
米田實著
◎號外バイロン　定價二十五錢　郵稅四十五錢
緒方維章著
◎號外シルレル　定價十八錢　郵稅四十八錢
內田貞著
◎號外ジョンソン　定價二十錢　郵稅四十錢
平田久著
◎第一卷カーライル　定價十八錢　郵稅四十八錢
竹越與三郎著
◎第二卷マコウレー　定價十八錢　郵稅四十八錢
山路彌吉著
◎第三卷荻生徂徠　定價十八錢　郵稅四十八錢
宮崎八百吉著
◎第四卷ルソヲ　定價十八錢　郵稅四十八錢
高木伊作著
◎第五卷ゲーテ　定價十八錢　郵稅四十八錢
北村門太郎著
◎第六卷エマルソン　定價十八錢　郵稅四十八錢
塚越芳太郎著
◎第七卷近松門左衛門　定價十八錢　郵稅四十八錢
山路彌吉著
◎第八卷新井白石　定價十八錢　郵稅四十八錢
人見一太郎著
◎第九卷ユーゴー　定價三十錢　郵稅六十錢
德富健次郎著
◎第十卷トルストイ　定價二十五錢　郵稅六十錢
森田思軒遺著　德富蘇峰　山路愛山　校定
◎第十一卷賴山陽及其時代　定價一圓八錢　郵稅
塚越芳太郎著
◎第十二卷瀧澤馬琴　定價五十錢　郵稅六十錢

傳記類

家庭叢書

◎孔子論　山路彌吉著　定價三十五錢　郵税四錢
◎露國皇帝　民友社編輯　定價二十五錢　郵税二錢
◎ゴルキー　伊達櫻堂、千葉紫草合著　附アレキシエフ　定價二十五錢　郵税二錢
◎勝海舟　民友社編　定價五十錢　郵税六錢
◎熊澤蕃山　蔡越芳太郎著　定價八十錢　郵税八錢
◎詩人西行　定價二十五錢　郵税二錢
◎第一卷家庭の和樂　定價二十錢　郵税二錢
◎第二卷夏の家庭　定價二十錢　郵税二錢
◎第三卷玩具と遊戯　定價二十錢　郵税二錢
◎第四卷家庭教育　定價二十錢　郵税二錢
◎第五卷小兒養育　定價二十錢　郵税二錢
◎第六卷家庭衛生　定價二十錢　郵税二錢
◎第七卷家政整理　定價二十錢　郵税二錢
◎第八卷簡易料理　定價二十錢　郵税二錢
◎第九卷社交一斑　定價二十錢　郵税二錢
◎第十卷婦人と職業　定價二十錢　郵税二錢
◎號外家庭理財　定價二十錢　郵税二錢
◎號外名士と家庭　定價二十錢　郵税二錢
◎號外紫式部　定價二十五錢　郵税二錢
◎號外清少納言　定價二十三錢　郵税二錢

娯樂書類

◎三井秀雄著　小學校適用遊戯全書　定價一圓八十錢　郵税十錢
◎村田祈著　水泳術指南　定價三十錢　郵税四錢
◎漕艇術　定價二十錢　郵税四錢

文學書類

◎野球の友　守山恒太郎著　定價上製三十五錢並製四十錢　郵税上製三錢並製六錢
◎將棋秘訣　名人小野五平編輯　定價三十錢　郵税四錢
◎惠磨遜の書簡　國民新聞社譯　定價三十錢　郵税四錢
◎日本文學梗概　民友社編輯　定價二十錢　郵税二錢
◎名家紀行文選　民友社編輯　定價三十錢　郵税六錢
◎ユーゴー小品　森田思軒重譯　定價三十五錢　郵税六錢
◎懷舊　ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒重譯　定價二十五錢　郵税四錢
◎懺悔　山路愛山著　定價二十錢　郵税四錢
◎歸省　湖處子　宮崎八百吉著　定價十五錢　郵税四錢

歷史類

◎新俳句　故正岡子規子監修　下山鳥山岩吉著　挿畫四幅三十餘　定價三十五錢　郵税六錢
◎笑魔　千葉紫草編　定價廿錢　郵税四錢
◎一語千金　歐文對照　定價十錢　郵税二錢
◎一語千金　定價十錢　郵税二錢
◎十九世紀外交史　平田久著　定價五十錢　郵税六錢
◎近時極東外交史　武田源次郎著　定價二十錢　郵税四錢
◎日露外交十年史　德富猪一郎序　濱田佳澄著　定價五十錢　郵税八錢
◎海戰の梯　松隈著　廿七廿八年　定價一圓二十錢　郵税十錢

世界國勢書類

◎最新朝鮮移住案内　山本唐太郎著　定價四十錢　郵税六十錢

◎中央亞細亞旅行記　井上雅二著　定價十二圓　郵税十六錢

◎露國事情　露國政府編纂　日本民友社譯述　定價十二圓　郵税十六錢

◎露國の闇黑面　後藤新平序　田原貞次郎譯述　定價八圓五十錢　郵税八十錢

◎俄國如是　中西牛郎譯　定價八圓五十錢　郵税八十錢

◎西伯利及滿洲　外務省編纂　定價十一圓　郵税十錢

◎露國皇室の内幕　後藤新平序　田原貞次郎譯述　定價八圓五十錢　郵税八十錢

政法書類

◎日露戰役國際公法論　英國ローレンス原著　古谷久綱譯　定價壹圓五十錢　郵税四十錢

◎選擧必携　民友社編纂　定價四十錢　郵税四十錢

◎國際法要論　ウエストレーキ原著　深井英五補譯　定價一圓五十錢　郵税十二錢

◎政府と政黨　米國ローウエル氏原著　民友社譯述　定價二圓五十錢　郵税十八錢

遺稿類

◎小楠遺稿　故横井平四郎著　男横井時雄編　上製金一圓五十錢　並製金一圓廿錢　郵税金十六錢

社會及經濟書

◎李氏經濟論　大島貞益譯　上下定價　郵税　貳圓五錢

◎近時の戰爭と經濟　ブロツホ氏原著　伊藤侯爵補譯　井上伯序　民友社譯補　定價一圓五十錢　郵税十錢

◎勤儉儲蓄のおしへ　小西孝太郎著　定價二十五錢　郵税四錢

◎支那貿易事情　吉田虎雄著　定價十一圓　郵税十四錢

雜書類

◎閑葛藤　臨宗禪師師口述　定價八十五錢　郵税八十五錢

◎育兒と衛生　民友社編纂　定價四十錢　郵税四十錢

◎國勢調査法　各國參照　高橋二郎著　定價三十錢　郵税四十錢

◎地理學小品　矢津昌永著　定價三十五錢　郵税六十錢

◎況翁叢話　陸軍々醫總監石黑忠悳男談話　定價二十五錢　郵税四十錢

◎東京市職員錄　東京市役所に於て調査（第二版）　定價六錢　郵税二錢

◎古文舊書考（漢文）　島田翰校訂　全四冊　定價金三圓五十錢　郵送料金十五錢　日本製四號活字帙入美本

唱歌

◎寒山詩集　島田翰校訂　全壹冊　定價貳圓五十錢　郵税十錢　日本製四號活字帙入美本

◎名譽の日本（明治三十九年十月再版）　大和田健樹作歌　菊判、美本　定價五錢　郵税二錢

ほまれの歌　大和田健樹作歌　田村虎藏作曲

◎第一編東郷大將（明治三十九年十月再版）　菊判、美本　定價五錢　郵税二錢

◎第二編乃木大將（近刊）　大和田健樹作歌　田村虎藏作曲

◎第三編大山大將（近刊）　大和田健樹作歌　田村虎藏作曲

◎第四編日本の軍人（近刊）　大和田健樹作歌　田村虎藏作曲

民友社書籍賣捌所

注意（一）此に列擧する賣捌店は本社直接に取引する店又は特別に記入申込ありし分に限る
（二）故に全國に於て間接に賣捌かるゝ店は此他に多數ありと知らるべし
（三）間接賣捌所にて店名廣告申込みあれば追々掲出すべし
（四）賣捌所にして取引中事故あり停止又は拒絶したる店名は茲に其事故を掲載することあるべし

東京市神田區表神保町　上田屋
同　表神保町　東京堂
同　京橋區銀座四ノ六　東海堂
同　日本橋區吳服町　北隆館
同　京橋區尾張町　合資會社
同　赤坂區青山南町　警醒社書店
同　日本橋區八重洲川岸　山陽堂
同　芝區三田四國町　松邑孫吉
同　赤坂一木町　天野書店
同　麹町區飯田町　山口書店
同　麻布六本木町　神戸書店
同　本郷春木町　北原書店
同　京橋區鍋屋町　小杉書店
同　出雲町　瓦明堂
同　本郷春木町　新橋堂
同　日本橋區芳町　國光書房
同　芝區愛宕下町　至誠堂
大阪市備後町　百華書院
同　南久太郎町四ノ一〇〇　吉岡書店
福音社
同　東區南波通町　博勞町四丁目
同　同　杉本書店
同　心齋橋筋淡路町北へ入　中川勘助
同　四區常安橋南詰四へ入　岡島新聞館
京都市佛光寺通り　中村正兵衛
同　三條通富小路角　文德堂
同　寺町通り　東枝律書房
同　河原町　便利堂
同　二條通り河原町東へ入　飯田信文堂
同　丸太町寺町四　大黑屋
横濱市吉田町一丁目　寶文館
同　伊勢佐木町　前川書店
同　野毛町　第一有隣堂
同　本町通り　勉强堂書店
同　辨天通り　第二有隣堂
神戸市元町五丁目　金海堂
同　市元町五丁目三十四　正心堂
同　市元町一丁目　吉岡支店
川瀨日東館
石丸日進堂
名古屋市本町　川瀨代助
同　玉屋町　靜觀堂
同　宮町　星野松次郎
廣島市鹽屋町　積善館支店
同　東横町　弘文館
東京府下八王子町　熊澤泰太郎
丹波國向日町　須田正進堂
山城國鞍山町　小山富之助
同　越山文進堂
大阪府豐能郡池田新町　鹽川豐翠館
丹波國柏原町　中井正吉
但馬國岡町　由利安助
淡路國洲本町　成錦堂
越後水原町　西村六平
同　長岡表四の町　目黑十郎
同　高田町　覺張治平
同　新發田町
同　亀田町
成見清兵衛
大島開成堂
東海林書店
日吉岡昌太郎堂
品川書店
宇都宮書店
同　支店
河內勇作
中田書店
小林清重堂
學海堂
弘文堂書店
山本吉太郎
藤谷旭日堂
久松堂書店
鳥飼榮藏
川岡清助
大蘆一年舍
周榮堂
武內彌三郎
奥田金正堂
吉原弘文堂
本郷數竹堂
横山萬
萩田書店
羽後國秋田市茶町
同　市縣廳縣通
同　增田町
同　大館町
羽後酒田上中町
若州小濱
福井市佐佳枝町
同　石川縣小松
同　金津市
能登鹿田町
富山市東四十物町
同　市
高岡市守山町
越中川邊
鳥取市上魚町
同市智頭
同市東町八十八番地
伯州倉吉
出雲國松江市
同　市天神町
岡山市弓之町百三番地邸
同　四大寺町
同　市四大寺町
同　市丸亀町
同　市上元町
作州津山元魚町
備中井原町
越後屋虎五郎
中村書店
吉岡昌太郎堂
日新書店
同　支店
宇都宮書店
同　支店
同　河內勇作
中田書店
學海堂
小林清重堂
弘文堂書店
山本吉太郎
藤谷旭日堂
久松堂書店
鳥飼榮藏
川岡清助
大蘆一年舍
周榮堂
武內彌三郎
奥田金正堂
吉原弘文堂
本郷數竹堂
横山萬
萩田書店

同　尼瀨
新潟市古町通　佐藤清三郎
長崎市勝山町　北光社
長崎市酒屋町　松崎和市
武州川越町　安中半三郎
武州兒玉町　集成閣
水戸市銀町　中村文會堂
同　上白木町　寺北文明堂
千葉縣千葉町　川又銀藏
同　茂原町　大澤郁文堂
同　四街道　松本新聞店
茨木縣水海道町　梁瀨書店
上野富岡　新々堂
同　桐生町　木田商店
上州原町　大出三泉堂
宇都宮市大工町　山口商店
野州足利町　內山商店
伊賀國上野晨人町　三泉堂
伊勢國松坂　安屋勝次郎
三州豐橋　清玉堂
遠州掛川町　富田安一
靜岡市矢部町　叢文堂株式會社
同　吳服町　內田書店
同　同　吉見義次
遠州濱松　太陽堂
甲府市柳町　谷島屋源三郎
大津市　文泉堂
沂江長濱町　同　支店
笑流大垣本町　波邊商會
飛彈高山町　平田鈴吉
信州長野市　齋藤祥三郎
同　市　西澤喜太郎
同　市　信濃毎日新聞社
同市新田町　荻原朝陽館
信州上田町　西澤支店
同　野澤町　岩下新聞舖
同　岩村田町　盛館
同　松本町　林堂
同　町本町二丁目　鶴文堂
同　洗馬　都筑文明堂
仙臺市國分町　佐勘書店
同　大町　木文書店
同　新停馬町　松榮堂
福島縣福島町　但木芳次郎
同　若松市下之町　澁谷進堂
同　白河町　荒井陽文堂
同　白河町　奥村書店
盛岡市　石井書店
盛中一の關大町　鈴木萬助
森縣青森市　文港堂書店
同　弘前市　鶴鳴閣
青森縣八の戸　桂華堂
山形市　伊吉商店
同市十日町四百二十六　八文字書店
荒井明治閣

山口縣山口中市町　超山名書店
山口縣厚狹郡　同　白銀支店
同　同　白銀日新堂
周防國岩國　宮井宗兵衛
和歌山市新通二丁目　向井藏次郎
愛媛松山市　土肥與平
同　宇和島町　日進堂書店
同　宇和島廣路通郡役所前　杉山靜清堂
高知市　開成舍
福岡市博多　積善館支店
同　森岡書店
筑前若松町　石松國吉
筑後久留米市　菊竹金文堂
同　八女郡里見村大湖　野田成章堂
同　四池郡大牟田橫口町　上野書店
豐前中津町　野依曆三
同　豐前行橋町　梅津蓊平
大分縣大分町　高橋種成
同　甲斐治平
同　忠文堂
佐賀市　菅我
同　縣竹田町　高野菊三郎
熊本市新町　大坪書店
同　南新坪井町　長崎次郎
同　上通五丁目　好文堂
中山知新堂

同　通町　石原書店
肥後八代町　時昌堂
宮崎上野町　修進堂書店
鹿兒島縣鹿兒島市　吉田幸兵衛
同　金光堂
同　谷村書店
北海道札幌南一條四三丁目　進振堂
南一條四三丁目　新聞賣捌合名會社
同　富貴堂
道小樽港　川南重祐
石狩國上川郡旭川一條通七丁目　旭書院
同　久富書店
道十勝國帶廣大通七の十
沖繩縣那覇區　博愛堂
同　豐盛書林
同　三笑堂
臺灣基隆草花街十一番戶　小西日進堂
同　臺南草花街　龍泉書店
韓國仁川港　山岡書店
同京城本町　日韓書房
臺灣臺北　新高堂

40

324
72

324
72

019392−000−6

324−72

鎌倉禅話

菅原　時保／著

M41. 3

ABG−0093